



中工精機株式会社取締役社長

## 工藤春三氏

(社) 瑞浪市土岐町七六

(宅) 瑞浪市稲津町

瀬戸、常滑、多治見、土岐、瑞浪等古い陶都をもつ中部地方は、今日も陶磁器の生産の活発なことでは断然他地方を凌駕している。現在陶磁器の生産を業とする者の大部分はここに集中しているといつていいだろう。

そうした同地方のそれら製陶業者に設備機械を供給する業者が、少なくないのは当然である。ここに紹介する中工精機(株)はそうした窯業機械メーカーの中でも、ことに活発な活躍を示している会社の一つである。

同社の取締役社長工藤春三氏は明治三十六年四月十日、瑞浪市稲津町に生まれた。窯業機械の製作をはじめたのは、大正十四年四月である。

工場ははじめ個人企業で、稲津鉄工所と称した。いうまでもなく町の名をとったものである。

今からちょうど四十年前のことである。現在六十三才を数える氏

も、当時は若冠二十三才だった。

少しぐらいの無理など意に介しない年ごろである。現在も仕事に熱心なことではられる氏が、当時さらにはげしい気魄をもって仕事にとりくんだであろうことは想像に難くない。

それに氏は研究心は極めて旺盛で、人に対してはあくまで誠実だった。それを反映して、製品は性能がよく、取り引きは堅実だった。

これがいい結果をもたらしたのは当然である。こうして工藤氏と稲津鉄工所は創業以来着実に前進を続けることができた。

こうして十年もすると、氏は業界に確固たる地位を確立するにいたったが、その後太平洋戦争が勃発し、陶磁器工業とその関連産業は軍需工業への転換を余儀なくされるにいたった。工藤氏は現瑞浪商工会議所会頭中島圭三氏とはかつて、航空機部品の製造をはじめることになった。

現在の中工精機（株）は昭和十七年こうして発足したのである。社名の中工は中島氏の「中」と工藤氏の「工」をとったものである。

爾来終戦までその仕事をつづけたのであるが、その間はじめのうちはまだよかったにしても、末期になると資材や労働力の払底で、惨胆たる有様であった。氏が一日も早く戦争が終わり、もとの窯業機械の製作に復帰できる日のくるのを翹望したとしても不思議はない。

昭和二十年夏、敗戦という不幸な結末を伴ってではあったが、ついにその日は到来した。工藤氏がそれを機として、欣然旧業に復したのももちろんである。

幸い、戦後陶磁器の生産は急速に復旧した。これが窯業機械の需要を活発ならしめたのはいうまでもない。

こうして中工精機の復旧も急ピッチで進展した。その結果数年後には早くも戦前の状態に帰ったばかりでなく、やがてそれを大きく上廻る躍進をとげるにいたった。

その後も陶磁器工業の発展に支えられて、前進の一路を直進した中工精機は、現在資本金三百万円、従業員約四十名、機械メーカーとしてはかならずしもスケールの大きい方ではないが、窯業機械メーカーとしては極めて充実した内容を擁するにいたっている。ことに技術の高いことは定評があり、その製品は優秀な性能をもって需要家の絶大な好評を博している。

しかも、研究心の旺盛な同社ではそれに甘んずることなく、現在も鋭意技術の向上、新製品の研究をつづけている。それは今後中工

精機の評判をさらに高いものにし、その発展を一層輝かしいものにするを期待してよからう。

こうして現在窯業機械業界に不動の地位をしめる工藤氏が、仕事に熱心なこと、研究心の旺盛なことはすでに記したとおりであるが、一方人柄は世話好きで、義侠心に富み、また公共的な関心も深く、公共のために骨身をおしむことをしない。氏は昭和二十三年以来二十七年まで稲津村会議員、二十六年稲津消防団長、三十三年瑞浪市教育委員、三十六年同教育委員長、三十八年瑞浪市会議員（現任）と数々の公職に携わっているが、それもこうした性格の結果であるう。

それによって、氏が地元産業文化の発展に寄与したところは極めて多い。氏が地元民の絶大な支持を得ているのも、故なしとしないわけである。

趣味は盆栽とゴルフ。とはいえ、その日常は公私とも極めて多忙で、現在ではほとんどそれをゆつくり楽しむ暇もないという有様である。

中工精機（株）専務春美氏は長男である。前記のように、春三氏が公事に奔走できるのも、今やこの春美氏がしっかり内を守っていて、会社のこととはほとんど心配しなくてもいいまできになっているからであろう。

中部經濟圈人物誌(続)

昭和四十年八月十日印刷  
昭和四十年八月二十五日発行

定価 一千円

編著者 山本省吾

発行者 吉村豊  
名古屋市東区東白壁町二一

印刷者 八木忠雄  
名古屋市東区徳川町五の一

名古屋市東区東白壁町二一

発行所 株式会社 貿易之日本社